

与論島民の盤山入植70年

与論への思い、開拓の心 未来へつなぐ

盤山入植の歴史

7月20日、第70回入植記念日の集まりが盤山公民館で行われ、住民約30人が集まりました。公民館周辺の掃除後に式典が行われ、自治会長のあいさつがあり、亡くなっていった仲間にも黙とうをささげました。

盤山は与論島の人口過密により、満州国錦州省盤山県にわたった与論開拓団が戦後鹿児島に引き上げてきて、昭和21年7月に入植してできた地域です。

昭和21年6月2日に博多港を経由し鹿児島に引き上げてこられました。県下各地（霧島・高峠・出水・川内・栗野・田代）の入植予定地を視察した結果、水と薪が豊富な田代村の国有地を入植予定地として選ばれました。これは、与論島でも満州でも、水と薪に恵まれなかったからだそうです。昭和21年7月18日に54戸165人が入植されたそうです。木を伐り、根を掘り起こす開墾作業はほとんどの方が初めての経験だったそうです。

県から配給される食糧だけでは不足していたので、ヤマクワの葉やアザミも食糧にしたそうです。

集落の名前は入植者全員が話し合い、満州の盤山にちなんで「盤山」と決めたそうです。

以来、畜産と農業、特にお茶の生産に力を入れて今日にいたります。

現在、盤山には25戸64人が暮



開拓記念碑前での集合写真

らしており（8月1日現在）ブローラー専業が2戸、お茶専業が10戸と農業を営んでいる方が多い地域です。現在は入植4世までが生まれています。

現在の思い

現在、盤山でブローラー専業を営んでいる、入植2世の基岸澄さんと和代さんにお話を伺いました。

Q 盤山はどのような土地柄ですか？

A 「盤山は一つの家族」 盤山開拓団としての苦難の歴史があったことにより仲間意識が強く、常に協力の姿勢がある。



開拓地の麦の手入（昭和27年）

「つらいことがあってもみんなが助けてくれるから頑張れる。だから、自分も仲間が困っていたら助けるのは当たり前。例えば、お悔やみがあった時も、家族の代表が行くのではなく家族全員で行く。そのくらい仲間を大事にしています。」

Q 第1世代の方から開拓のお話を聞いていたら教えてください。

A 「全員で戻ってきた。心に恥じることはない」

「母の基カミから聞いた話だが、戦争が終わって女子はソ連兵から追われる立場となったため、顔を黒く塗って男装し、昼間は物陰に隠れ、夜移動するような生活が続いたそうです。母は田代に来たとき『ソ連兵がここまでは追ってこないだろう。ここなら見つからないだろう』と安心したのが一番だったそうです。また、そんな困難な道のりの中でも、『生きた子どもを満州国に残すようなことはしなかった。それだけは心に恥じることはない』と話していました。」

Q 現在の与論とのつながりについて教えてください。

A 「離れていても自分たちのルーツは与論島」 「自分たちのルーツは与論だか



昭和24年4月3日花瀬公園にて（盤山青年団）

ら忘れてはいけなし、後世にも引き継いでいかないといいない。私は昨年息子と与論に行つて、親戚一同と息子の顔合わせを行った。息子は、今年の夏もいとこ達と集まって自分たちのルーツを知るために与論島に行こうと計画してるみたいです。子ども達に与論を引き継ぐのが私の仕事なんです。」

与論島からの盤山入植70年を迎えた今も、親から子へ入植の歴史、与論島への思いが引き継がれています。

先人たちの切り開いた歴史があるからこそ今の自分たちの家族、生活があります。

家族で自分たちのルーツ育った環境を話し、語り継いでいくことも家族を大切にすることにつながるのではないでしょうか。